



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 69 号 2016 年 6 月 2 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 24 回大会委員長挨拶>

若松 養亮：本年度の大会にはご期待ください！

<「学会賞受賞」のことば>

河野 莊子：日本青年心理学会第 7 回学会賞を受賞して

<特集：青年と旅>

草野いづみ：タイの旅の記憶

高木 秀明：人生の最初の旅

伊田 勝憲：疾風怒濤の普通列車

小塩 真司：「見せる」旅

<書評：私のおすすめ、この一冊>

増淵 裕子：鈴木 研二(著)

『見られる自分—マザ・コンと自立の臨床発達心理学—』

<広報>

ニューズレター編集委員会からのお知らせ

事務局からのお知らせ

<第 24 回大会委員長挨拶>

本年度の大会にはご期待ください！

大会委員長 若松養亮（滋賀大学）

すでにお知らせがありましたように、本年度の第 24 回大会は滋賀大学でお引き受けいたします。

本大会では多くの魅力あるプログラムを用意しています。まずセミナーとして立命館大学のサトウタツヤ先生をお迎えし、「質的研究がめざすもの」というご講演をいただきます。サトウ先生は日本質的心理学会を牽引するお一人であり、近年では TEM（複線径路等至性モデリング）を推進しておられます。

次は「青年期研究 2.0 -問題意識と研究デザインのブレーク・スルーとは-」というラウンドテーブルです。ありがちな問題設定ではなく、研究の新たな地平をめざすチャレンジを続けている岡田努氏・河野莊子氏・平石賢二氏の 3 名に話題提供をいただきます。

さらには James Côté 氏による講演（スライドと要約あり）「新しい発達段階としての成人形成期（emerging adulthood）は妥当か」があります。青年期から成人期という発達の従来の理解を相対化する時間になると思います。

このように、いずれも参加者の皆様の新たな問題意識や研究手法との出会いになる場を多く用意しています。どうぞご参加ください。大会公式サイト (<http://www.edu.shiga-u.ac.jp/~wakamatu/jsyap/>; 学会 HP からリンクがあります) にて、今後も詳しくお伝えしていきます。

<「学会賞受賞」のことば>

日本青年心理学会第7回学会賞を受賞して

河野 莊子 (名古屋大学)

私たちの論文「青年犯罪者の共感性の特性(岡本英生・近藤淳哉と共著、第25巻第1号掲載)」が、日本青年心理学会第7回学会賞を受賞しました。このような栄誉を賜るとは思ってもいませんでしたので、当日、受賞発表の場にいることができませんでした。大変残念に思っています。この場をお借りして非礼をお詫びいたします。

昨今の矯正現場では、再犯防止が喫緊の課題とされ、その流れの中、共感性を高めるための心理教育プログラムが盛んに実施されています。盗んだり殴ったり、共感性が低いと言わざるをえない非行・犯罪者たちですが、親や恋人が病気の際は寝ずに看病するなど、高い共感性を示すことも珍しくありません。一見矛盾しているように見えるからこそ、彼らの共感性の何にどのように働きかけると再犯防止に効果的なのかを見極める必要があります。しかし、現行のプログラムにその観点があるようには思えません。本論文は、現状への問題提起でもあったのです。

高い評価をいただいたことで、私たちはとても励まされました。調査協力者のみなさんをはじめ、この論文に関わってくださった多くの方々に感謝するとともに、さらに研究を面白く、社会の役に立つものにするにはどうすればよいのかを、これからも考え続けていきたいと思っています。

<特集> 青年と旅

青年の「旅」は、見聞を広めたり人生観を構築したりと、青年にとって非常に価値あるものとされてきました。しかし、最近になって青年の「旅離れ」が指摘されています。今日の青年にとって、「旅」は価値を見出すことができない不要なものとなってきているのでしょうか。本特集では、会員の先生方に「青年と旅」というテーマでご寄稿いただきました。青年の「旅」について、会員の皆様のご一考の機会となれば幸いです。ご執筆いただいた会員の先生方、貴重なご意見ありがとうございました。(担当: 杉本英晴・則定百合子)

タイの旅の記憶

草野 いづみ (帝京大学教育学部)

35年くらい前のことなので記憶が曖昧になってしまったが、私が初めて自分が稼いだお金で出かけた海外旅行はタイへの旅であった。大学を卒業し就職した初めての冬休み

のこと。参加していた国際関係の勉強会で企画されたツアーに参加したのだった。各自で航空券や紹介されたホテルを予約し現地集合する。コアな部分是一緒に行動するが、あとはそれぞれの自由というスタイルだった。

一緒に行動する予定の中学教師 T さんが来るまで一人旅となった私は、夜 10 時頃、バンコクのドンムアン空港に到着した。市内のホテルにタクシーでいくのにウロウロしていると、同じ年頃のドイツ人学生カップルに声をかけられ、同じホワランポーン駅方面のホテルということで相乗りすることになった。ホテルまでお互い拙い英語でおしゃべりした。

折しも、日本で社会科教科書から「侵略」の表記を削り、「進出」等書き換えるという問題が起こっていた最中であり、タイ紙はもちろん、英語紙（シンガポール、香港など）もそのことをトップ記事として取り扱っていたのを目にしていた。教育学科の学生であった私は、このことが当事者であるアジアや他国でどのように受けとめられているのか大いに関心があった。かつて日本と同盟国であり同じ敗戦国であるドイツの若者はどう思うのか聞いてみると、「あり得ない。ドイツでは他国を侵略したことについて詳しく学習する。ナチスのような誤りを二度と犯さないために歴史を学ぶのだ」という強い口調の言葉が返ってきた。

実はこの旅の目的地は、タイ・ビルマ（ミャンマー）国境のカンチャナブリにある泰緬鉄道跡であった。「クワイ河マーチ」で有名な映画「戦場にかける橋」の舞台となった場所で、第二次大戦中に日本軍が支配し、タイからビルマへの鉄道建設のために連合軍捕虜（英国、オーストラリア、オランダ人など）に過酷な労働を強いた場所である。捕虜だけでなく、地元のタイ人はじめ、ビルマ人、マレーシア人、インドネシア人など 10 数万人が労務者（ロームシャという日本語が残っている）として連行され、「枕木 1 本に人 1 人」と言われるほど多くの人々が犠牲になったことは日本ではほとんど知られていない。当時この地で憲兵隊通訳をしていた元日本兵の老人が、今もここに暮らす元労務者の人々に会って「償いたい」という旅に同行したのだった。地元の戦争博物館入り口には「FORGIVE BUT NOT FORGET（許そう、しかし忘れない）」の文字があった。

バンコクの路地にまだ物乞いの人や痩せた野良犬が多くみられた貧しい時代だったが、人々は温かく、市場は活気があふれ、寺院や王宮は金色に輝いていた。しかし、私にとって青春最初の旅の強烈な印象は、過去の日本と向き合うことにつながっていた。まだ存命していた当事者は言葉では多く語らないが、存在の重みが私を圧倒した。「百聞は一見にしかず」というが、若い時代の旅は、今いる自分の場所と別の視点に身をおく経験をすること、現場に足を運び、当事者に会って自分の体と心の全身で体験すること、これに尽きると思う。

人生の最初の旅

高木秀明（放送大学神奈川学習センター）

この 3 月末で 35 年間勤務した横浜国立大学を定年退職しました。それを機に、編集委員から執筆依頼がありました。青年期に入った私の人生の最初の旅を紹介します。

私が初めて家を離れて生活をしたのは、高校に入学したときです。地元の能登（石川県羽咋市）から離れて、金沢大学教育学部附属高校に入学しました。高校には知り合いは誰も居ませんでした。高校の近くの賄い付きの下宿に入りましたが、もう 1 人の下宿

生は金沢大学の学生で、付き合いはありませんでした。この高校に入ったのは、偏差値の高い有名高校に入るといふ自分の見栄からだったと思います。それ以外のいろいろな面でのレディネスが無い状態で生活が始まりました。その状況乗り越えて進んで行くには、力不足でした。能登の方言と金沢の方言の違いに戸惑いました。周りは金沢弁ばかりです。内向的な性格の上、金沢弁を使えないため、話せる相手が出来ず、友達が出来ませんでした。

そんな中で自分の支えは勉強が出来ること、野球が上手いことでした。中学の時に模擬試験の成績が県で3番になりメダルが贈られてきたこと、オール能登の野球大会で優勝し優勝旗を一晩家に飾れたことが、誇りでした。しかし、高校最初の中間テストにおいて、いつも大体100点を取ってきた数学で30点台という点を取り、自分を支えられなくなりました。教科書に出ているような素直な問題しか解いたことがなく、附属中学の優秀な生徒の間で差を付けるための、ひねった難しい問題が大量に出るようなテストは受けてこなかったのです。その結果、下宿生活を続けることが出来なくなり、実家から通うことになり、野球部も辞めました。この後は、少しずつ成績を挽回し上位三分の一位になりましたが、それ以上の成績は無理でした。

私の人生の最初の旅は苦い思い出ですが、私なりに頑張っしるのぎ、成長できたのではないかと思います。

疾風怒濤の普通列車

伊田勝憲（静岡大学）

趣味として時刻表検定1級を取得した院生時代、名古屋から札幌への帰省に「青春18きっぷ」を使って片道30時間かけていた（夜行快速2泊＋普通列車）。不惑を迎えた今からふり返ると、その選択自体が青年らしい。拙稿では、「自分探しの旅」ならぬ「いつもの帰省旅行」から学んだことについて、時間と空間を意識しながら考えてみたい。

普通列車での長距離移動はとて「のんびり」している時空間をイメージしがちであるが、意外とそうでもない。「鈍行」と言ってもスピード自体は高速道路を走る車と同等、数分ごとの停車で加減速は慌ただしい。そして何より「青春18」の季節は、時刻表で調べ上げた「最短乗り継ぎルート」に多くの人が集中し、上野出発時は10両編成でも東北での乗換時には3両程、しかし札幌を目指す同志は減らずにラッシュ時以上の超満員状態、しかも乗換駅ごとに大荷物を抱えながらダッシュで着席競争（奥に座ると次の乗換で不利）……ということになり、途中脱落する人も現れ（仲間も道連れ）、体調不良などが重なるとまさに疾風怒濤である。しかしながら、同じ経路でも時間帯を1本遅らせるだけで電車はガラガラである。乗り継ぎが不便になる分、一部区間だけ特急利用で挽回するか、途中で宿泊する必要があるものの、4人掛けボックスシート独占の快適空間で車窓をゆっくり楽しむこともある。

他の人と同じ行き方（生き方）をしていると想像以上に苦痛も多く、人混み（流行）をやり過ぎた方が気ままな旅（人生）を満喫できる……それでも仲間（理解者）がいると心強い。これが青年期の旅の教訓というのはあまりに普通であるが、時代とともに「青春18」を取り巻く状況も移り変わり、北海道にも新幹線が開業した。当方は「旅行命令」に従うばかりで工夫の余地もないが、果たして現代の青年はどんな選択をするだろうか。

「見せる」旅

小塩真司（早稲田大学文学学術院）

2月から3月にかけて、私立大学では授業期間が終わり大学入試の時期、特に卒業予定の学生たちは卒業旅行と称して国内外各地に向かう。今の大学に来てからは、この2ヶ月間のあいだに複数か所の海外旅行をするという学生の話聞く機会も多い。

卒業旅行は1980年代から定着し始め、バブル経済期の1980年代後半には当たり前に見られる行動になったようである（江川，1988）。この背景には大阪万博、日航ジャンボ機就航、1ドル150円を切るようになった円高ドル安、好景気など、様々な要因が考えられる。もちろん経済面の要因は大きい、今も大学生の間には卒業旅行に行くのが当然という雰囲気があるように感じる。ゼミ生の中には、学期中にふらっと海外を旅してきたり、1年間休学しバックパッカーになって世界中を巡ってきた学生もいる。

旅の大きな目的は、日常では経験できない文化や雰囲気に触れ、体験することにあるだろう。つげ義春の漫画には1970年代の旅先で滞在する田舎がよく描かれるが、そこでは日常とは隔絶された風習に困惑する都会から来た若者の様子が強調される。しかし現在では、国内ではそこまで日常と断絶した感覚は得られないかもしれない。やはりそこは、国外へ向かおうとする動機づけへとつながるだろうか。

昔と違うのは、世界中のどこにいてもSNSで旅の様子を知ることができる点である。南米にいてもアフリカにいてもLINEがつながり、Facebookが更新されて雄大な風景の中に立つ学生たちの様子をほぼリアルタイムに見ることができる。帰国を待つ側としては安心できる便利なシステムだが、今や旅は「日常からの離脱」よりも「皆に見せる」という目的の比重が大きいかもしれない。

【引用文献】

江川 緑（1988）. 日本青年の短期海外研修-異文化体験と精神衛生- 国際政治, 87, 124-138.

<書評：私のおすすめ、この一冊>

『見られる自分－マザ・コンと自立の臨床発達心理学－』

鈴木研二(著) 創元社(2004年刊)

増淵裕子（昭和女子大学生生活心理研究所）

青年期は、「見られる自分」を意識する時期である。自意識が高まり、「見られる自分」ばかりを気にして悩んだり、「見られる自分」と「見る自分」との間で葛藤したり、「見られる自分」を過剰に演出したりする。青年は、このような葛藤をしながら現実には他者や社会と関わる中で、ほどよい「見られる自分」を身につけ、アイデンティティを形成していく。

本書は、深層心理学、トランスパーソナル心理学等を専門とし、心理療法家、夢分析家でもある著者が、昔話や夢を題材に、人生の前半部分である乳幼児期から青年期、成人期にかけての心の発達を「カラ」と「中身」という独自の視点から論じたものである。著者によれば、我々の心は「カラ」と「中身」からなる。「カラ」とはすなわち「見られ

る自分」のことであり、社会性のことである。一方、「中身」とは、本来の自分らしさや内面の充実を意味する。この「カラ」と「中身」という視点を以て、三年寝太郎や飯食わぬ女、一寸法師や手なし娘の心の状態がどのようなものであるか、そしてどのように青年期の課題を乗り越えて大人になっていくかを分析している。

物語を題材としているため、青年の心の発達や問題を具体的にイメージしやすい。また、題材は昔話であるが、現代の青年の問題（寝太郎はひきこもり、飯食わぬ女は過剰適応など）に大きく通じるものがあり、ハッとさせられる。そのような心の状態の成り立ちと理解・支援の方向性についても、ヒントが多く詰まっている。

「カラ」は簡素で丈夫なものが良いと著者は言う。「カラ」が厚すぎても薄すぎても生きづらい。人間の心の発達には、ほどよい「カラ」＝適度な社会性を身につけることと、「中身」＝内面の探求や自己実現の両方が必要であることを改めて実感できる。著者のイメージや連想が豊かであるあまり、読み手はついていきにくい面も多少あるかもしれないが、心を楽しみ解放して読んでいただきたい。青年への温かいまなざしに満ち、ユニークな視点で青年理解の視野を広げてくれる一冊である。

<広報>

ニューズレター編集委員会からのお知らせ

担当理事 杉村和美

いつもニューズレターをご愛読下さりありがとうございます。昨年度の大会時にご案内した通り、本誌は次号より電子化され、青年心理学会のHPに掲載されます。会員の皆様へは、本誌にアクセスするためのリンクをメールニュースで送ります。電子化に伴い、会員異動等の個人情報やニューズレターに掲載せず、別の方法でお知らせする予定です。

今後も読み応えのあるニューズレターを発信していきますのでご期待下さい。また、これまで同様、会員からのご意見や情報も掲載します。積極的に活用して下さい。

なお、ニューズレター編集委員会は2016年度5月をもって、杉村和美ニューズレター担当理事、長峰伸治委員、小沢一仁委員が退任します。6月より新たな体制は、小塩真司ニューズレター担当理事、則定百合子委員長、杉本英晴副委員長となります。さらに、引き続き留任する三好昭子委員に加えて、佐方哲彦委員、家島明彦委員が就任します。

今後とも、日本青年心理学会員の交流の場としてのニューズレター編集に、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

事務局からのお知らせ

I. 2016年度第24回大会について

今年度の第24回大会は下記のとおりで開催されます。詳しくは同封の一号通信をご覧ください。みなさまからの参加と発表申込みをお待ち申し上げます。

開催場所：滋賀大学教育学部

大会委員長：若松養亮（滋賀大学教育学部教授）

日時：2016年11月26日（土）～27日（日）

問い合わせメールアドレス：wakamatu@edu.shiga-u.ac.jp

II. 2016年度からの新役員体制

昨年夏に行われた役員選挙の結果を受けて、前大会時に開かれました新理事会において、2016年度からの新役員体制および常任理事の役割分担を下記のとおりといたしました。理事長指名の常任理事1名が加わっています。

理 事 長	大野 久	(立教大学)	
常任理事	小塩 真司	(早稲田大学)	: 広報・ニューズレター担当
	佐藤 有耕	(筑波大学)	: 機関誌担当
	白井 利明	(大阪教育大学)	: 研究担当
	平石 賢二	(名古屋大学)	: 国際交流担当
	溝上 慎一	(京都大学)	: 事務局
	三好 昭子	(帝京大学短期大学部)	: 事務局補佐
	若松 養亮	(滋賀大学)	: 大会・出版企画担当
理 事	浦上 昌則	(南山大学)	
	後藤 宗理	(椙山女学園大学)	
	杉村 和美	(広島大学)	
	高木 秀明	(横浜国立大学)	
	都筑 学	(中央大学)	
監 査	伊藤美奈子	(奈良女子大学)	
	伊藤 裕子	(文京学院大学)	* 敬称略、理事長以外は五十音順

* 任期は通常の理事と同じで、2016年4月1日から2019年3月31日までです。

* 事務局は引き続き溝上が担当いたしますが、2017年度の年会費の納入、入退会処理は三好昭子先生に事務局補佐としてお手伝いいただきます。

III. 会員異動

IV. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。